コーパスからわかる

言語変化・変異と言語理論 3

小川芳樹
中山俊秀
［編］

開拓社

er, Dordrecht.
Rizzi, Luigi (2004) "Locality and Left Periphery," *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures* 3, ed. by Adriana Belletti, 223-252, Oxford University Press, Oxford/New York.
Rizzi, Luigi (2006) "On the Form of Chains: Criterial Positions and ECP Effects," *Wh-Movement: Moving On*, ed. by Lisa Cheng and Norbert Corver, 97-133, MIT Press, Cambridge, MA.
Rizzi, Luigi (2011) "Minimality," *The Oxford Handbook of Linguistic Minimalism*, 220-238, Oxford University Press, Oxford/New York.
Ross, Haj (1984) "Inner Islands," *BLS* 10, 258-265.
Saito, Mamoru (2004) "Ellipsis and Pronominal Reference in Japanese Clefts," *Nanzan Linguistics* 1, 21-50.
Saito, Mamoru (2016) "(A) Case for Labeling: Labeling in Languages without ϕ-feature Agreement," *The Linguistic Review* 33, 129-175.
Saito, Mamoru (2017) "Japanese Wh-Phrases as Operators with Unspecified Quantificational Force," *Language and Linguistics* 18, 1-25.
Takahashi, Daiko (1990) "Negative Polarity, Phrase Structure and the ECP," *English Linguistics* 7, 129-146.
Takahashi, Daiko (1994) "Sluicing in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 3, 265-300.
Tanaka, Hidekazu (1997) "Invisible Movement in *Sika-Nai* and the Linear Crossing Constraint," *Journal of East Asian Linguistics* 6, 143-188.
Tomioka, Satoshi (2007) "Pragmatics of LF Intervention Effects: Japanese and Korean Wh-interrogatives," *Journal of Pragmatics* 39, 1570-1590.
Tomioka, Satoshi (2009) "Why Questions, Presuppositions, and Intervention Effects," *Journal of East Asian Linguistics* 18, 253-271.
Watanabe, Akira (1992) "Subjacency and S-structure Movement of Wh-in-situ," *Journal of East Asian Linguistics* 1(3), 255-291.
Yoshida, Tomoyuki (1999) "LF Subjacency Effects Revisited," *MIT Working Papers in Linguistics* 34, 1-34.
Yoshida, Tomoyuki (2016) "On the Interpretation of Indeterminate Pronouns in Japanese," *Educational Studies* 58, 57-65.

幼児の言語獲得から生成文法理論へ*

村杉 恵子
南山大学

1. はじめに

幼児言語の記述と分析は，生成文法理論の発展にどのように寄与しうるのだろうか．本稿では，言語獲得の論理的問題を概観した上で，Ogawa corpus (CHILDES) に含まれる Ayumi の発話も例にとりつつ，言語が「どのように」獲得されるのかについて記述的研究を整理する．そのうえで，言語獲得の中間段階が「なぜ」存在するのかを問い，先行研究の知見を基礎に考察し，それが現代言語理論に対して与える示唆について，Murasugi (2020) の提案した分析を紹介する．[1] 具体的には言語間相違を説明する仮説として Saito (2016) の提案した「一致を欠く言語」における格などの反ラベリングに関する仮説について，言語獲得の側面から証拠を与える．幼児言語に典型的にみられる（疑似）主節不定詞現象や格の「誤用」は，ϕ素性一致のメカニズムが母語のそれとは異なることに起因すると分析し，英語を母語とする幼児において自由語順のような「誤った」語順が観察されるのは，その獲得段階ではラベル付けの前提となる「ϕ素性一致」と「格」の仕組みが未獲得であるが故であるという仮説を概説する．

第2節では，自然科学の解明へと誘う「不思議」が，第一言語獲得研究の入り口にも存在することについて概観する．第3節では幼児言語の特徴に関する経験的な事実を整理し，第4節では，その特徴がミニマリスト理論の精緻

* 本稿は，2020年8月16日（日）～8月17日（月）東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」主催 第6回ワークショップにおいて招聘講演を行った内容に修正を加えてまとめたものである．編者である小川芳樹氏をはじめ，本稿に対して，有益な助言をくださった査読者の方々と齋藤衛氏に心より感謝する．本研究の実施にあたり，科学研究費補助金 (No. 17K02752, No. 20K00587) および 南山大学パッヘ研究奨励金 I-A-2 (2021, 2022) により支援されている．ここに記して感謝する．
[1] Murasugi (2020) で示された分析は，村杉 (2020) においても一部紹介されている．

化に向けて示唆するところについて論考する．幼児言語の発話を，そのコンテクストや発話の意図がわかるように正確に記述し，それを言語理論のもとで対照言語学的に分析することによって，言語獲得研究は言語理論の構築のための一助になりうることがある．本稿ではその可能性について考えてみたい．

2. 言語獲得の不思議

人は，多くの場合，生後，わずか数年という短期間に母語を獲得する．人に与えられる言語環境や言語入力には個人差がある．それにもかかわらず，人は文の文法性について（無意識に）判断することができ，その判断能力はIQにかかわらず，基本的に等質である．本節では，具体例を示しつつ，人のもつ等質な文法知識が，模倣によって得られているものではないことについて考察する．

長野県伊那地方の方言を例にとろう．伊那方言を母語とする話者は（1a）ならびに（1b）はいずれも文法的な文であると判断する．[2]

(1) a. ざざ虫　食べるづら　（ざざ虫　食べるでしょう.）
　　b. ざざ虫　食べるら　　（ざざ虫　食べるでしょう.）

では文末表現の「づら」と「ら」は統語的に同じようにふるまうのかといえば，そうではない．伊那方言を母語とする話者は，文法的である（2a）に比して（2b）は非文法的であるという文法判断をする．

(2) a. あれは誰づら　（あれは誰だろう.）
　　b. *あれは誰ら　　（あれは誰だろう.）

(2a) に示されるように「づら」は名詞素性を担う範疇を選択する一方で，(2b) に見るように「ら」は名詞素性を担う範疇を選択することができない．この点において，二つの文末表現には統語的な違いがある．

しかし，この二つの間にある相違点はそれだけではない．「づら」と「ら」は，それぞれの文が置かれるコンテクストによってその文の適格性に差が生じるという．(3) をみてみよう．

[2] ここで文法判断を施す方言話者は実母（村杉恵美子氏（昭和12年生まれ））であり，本論で提示する文法判断は氏の直感に基づいている．

(3) a. あの人，ざざ虫　食べるづら
　　b. #あの人，ざざ虫　食べるら

長野県伊那地方の方言話者は，(3a) は独り言として（「あの人はざざ虫を食べるだろう」）適格な文といえるが，(3b) は同状況において独り言としては不適格な文であると判断する．(3b) が可能となるのは，談話の場に聞き手がいて，その聞き手に同意を求める場合であるという．

さらに伊那方言の文末表現には「だら」も存在する．同母語話者は (4) に示す「づら」と「だら」を含む二つの文には，意味の違いがあると説明する．

(4) a. 明日は雨づら　農作業はできね
　　（明日は雨だろうね．農作業はできない.）
　　b. 明日は雨だら　農作業はできね
　　（明日は雨でしょう．農作業はできない.）

(4a) は話し手の推量を意味する一方で，(4b) は，話し手にとって不確実である事柄について，話し手が聞き手に同意を求める場合に用いられるという．したがって話者の考える「雨になるだろう」確率は，(4a) のほうが (4b) よりも高いように思われるという．(4) は，文末表現が名詞句「雨」を選択している点で共通しているものの，「づら」と「だら」のいずれの文末表現を用いるかによって，異なった意味が生じるようである．

村杉 (2017) は，(4a) のような「づら」は，いわゆる標準語の「だろう」と，少なくとも主文については統語的に同様にふるまうと提案している．「だら」もそのように統語的に分析される可能性はあるが，一方で，二つの文末表現には，モダリティに関する相違も存在するようである．(5) をみてみよう．

(5) a. 明日は雨づらよ
　　b.??明日は雨だらよ

(5a) は，「明日は雨だろうよ」という話し手の主観的な推量を意味するため，この場合には文末表現「よ」も自然に後続される．一方，(5b) に示すように話し手にとって不確実である内容について文末表現「よ」が後続する文は不自然であると判断される．主観的な推量として「明日は雨だろうよ」とは言えても，自分はよく雨が降るかどうかわからないのにもかかわらず，不確定な事柄について聞き手にむかって「明日は雨でしょうよ」とする文は不適切であるというのである．

以上は，昭和12年生まれの伊那方言話者のメタ言語知識を記述したもので

あるが，その文法的分析が実際に説明的に妥当なものであるのか否かはわからない．また，読者におかれては，上に挙げた「づら」「ら」「だら」の間にある共通点と相違点について，実は不明な点が多いのではないだろうか．そもそも，「づら」と「だら」の違いについて，母語話者が自分自身のメタ知識をどのように記述するかは必ずしも完全に一致するわけではない．例えば，湯澤(2003) は『おらが知ってる伊那の方言』の中で，「づら」は「… でしょう」という意味で，「だら」は「〇〇だろう」という意味であると記している．

言語獲得の不思議は，このような細やかな意味の違いや文法性，あるいは適格性が，学習者に明示的に伝えられ難い点にある．たとえ（親の）メタ言語知識が正しく）表現されたとしても，幼児はそれを理解して，その文法を学び，親と等質の文法判断に至るとは考えにくい．言語に特徴的な文法性は，方言の文末表現においてすら，母語話者に無意識の知識として獲得される．

幼児が親からの入力を模倣することによって言語を獲得するわけではないことは，一定の発達段階に至らなければ，たとえ親から直接的な修正を受けたとしても，幼児はその「誤用」を修正できないことがある事実からもわかる．この点について，鈴木（1987: 172）は発話のコンテクストを記しつつ，以下のように指摘している．

(6) 幼児は成人の文法からみると，多くの誤った表現や不適切，不十分な表現を行うが，そうした表現の修正や指導は効果がうすい．筆者の娘が二歳二か月の時の会話を例にすると，娘「(風船を差し出して) パパ，フーセン，フクランデ！」→父「(受け取って) ふくらんで，じゃないでしょ！「ふくらまして！」でしょ！」→娘「フクラマセテ」→父「ふくらまして！」→父親がふくらまして，手渡す．まもなくして，別の風船を持ってきて，「フクランデ！」→父「ふくらまして！」→娘「フクラマシテ！」→父親がうまく膨らませないのを見て，娘「フクランデ，フクランデ！」

このような例は，たとえ幼児が，発話した文が適切ではないとする情報を親から直接的に与えられたとしても，すぐに修正することはできないことを示している．

(6) に示した例は，幼児が動詞を獲得する段階で，自動詞と他動詞を（「誤って」）同形で表す段階があることを示しているが，同様の「誤用」は Ogawa corpus に含まれる Ayumi の発話においても 2 歳から 3 歳頃に観察されている．[3]

[3] 本論で引用する Ayumi データは，小川芳樹氏自身が Ayumi の発話をコンテクストなど

(7) a. お母さん　窓　閉めて (2;08)
　　b. お母さん　閉めないよ（「閉まらない」の意味で）(2;08)

Ayumi は，他動詞「閉める」を目的語「窓」と共起させて「正用」する一方で，同形を「(観察者の記述によると)「閉まらない」の意味で」(「誤って」) 用いている．親の模倣とは考えにくい「誤用」にすら，個人差なく共通する特徴がみられるという事実は，幼児が，自らの脳に仕組まれた言語獲得の機構を経て，母語とする大人の文法へと至ることを示唆している．[4]

3. 幼児の発話にみる特徴

では，幼児の経る言語獲得のプロセスとはどのようなものであろうか．そのプロセスはどのような具体例として発話に表れるのか．幼児の獲得段階の文法はどのようなものかを示すヒントになる例をみてみよう．

幼児は，喃語，一語文，二語文，そして多語文を経て，大人の文を発話するようになる．その中間段階の発話には，言語にかかわらず共通する特徴がある．母語の基本語順は，わずか二語文の段階ですでに決定されているとする観察事実がある．例えば Radford (1990) は，2 歳頃の幼児ですら，動詞句や前置詞句においては，(8) に示すように，それぞれ主要部である動詞 (V) や前置詞 (P) が，その補部に先行することを知っていると指摘する．

(8) a. Want Lisa. Turn page. Reading book. Touch heads.
(Radford (1990: 70))
　　b. Round here. Over there. In there. Without shoe.
(Radford (1990: 72))

このような観察は，古くは，軸と解放 (Pivot and Open) 群の関係として，のちには Wexler (1998) によって Very Early Parameter Setting (VEPS) 仮説のもとで，いわゆる主要部パラメターの値が言語獲得の極めて早期の段階で定められるとして説明されている．

動詞や前置詞とその補部の語順が言語獲得のきわめて早期の段階で獲得されていると考えられる一方で，英語を母語として獲得する幼児の二語文には，奇

も付記した上でエクセル表にまとめたデータ集によって確認されている．ここに記して深く感謝する．

[4] この分析の詳細については Murasugi and Hashimoto (2004) ならびに Murasugi, Hashimoto and Fuji (2007) などを参照されたい．

妙な特徴があることも Radford (1990: 248) などによって指摘されている．22 か月から 23 か月頃の Kendall の二語文には，基本語順とは異なる語順の平叙文が観察されるという．

(9) a. Look Kendall ('Look at Kendall')
b. Writing book
c. Break Fur-Book (name of book)
d. Bite…finger

(10) a. Doggie sew ('Sew doggie')
b. Kimmy kick ('Kick Kimmy')
c. Kendall pick-up ('Pick up Kendall')
d. Doggie lookit ('Look at doggie')

英語を母語として獲得する 1 歳から 2 歳頃の幼児は，語順に関しては大人と齟齬のない (9) に示すような文に加えて，(10) のように目的語であるべき名詞句を動詞に前置した「誤った」語順の文も発話するという．それは，あたかも，英語を母語とする幼児が，日本語のような言語に特徴的な「かき混ぜ文」を発話しているようにも映る．日本語のかき混ぜ文とは (11b) のようなものである．

(11) a. パパがあゆみを抱っこする
b. あゆみをパパが抱っこする

目的語を主語に前置させる ((11b) のような) 奇妙な語順の文を自発的に発話する以外にも，2 歳頃の幼児の発話には特徴的な「誤用」が観察されている．いわゆる (疑似) 主節不定詞現象と称されるものである．幼児の発話する主文において，動詞が「不定形」の形式で表れる．Murasugi, Nakatani and Fuji (2010) によると，その形態的な具現化の様態は，言語を三分化する．(12a) に示すように，フランス語やドイツ語，オランダ語のような言語では主節に不定詞が表れる．一方，語幹が独立できる動詞を持つ言語 (英語，スワヒリ語など) では，(12b) に示すように裸動詞が，そして動詞が拘束形態的性質を担う語幹を持つ言語 (日本語，韓国語，アラビア語，トルコ語，ルーマニア語など) では，(12c) に示すように (疑似不定詞としての) 一定の活用のみを伴う代理形が典型的に主節の動詞として表れる．

(12) a. Dormir petit bebe (1;11) (フランス語)
Sleep-INF little baby (Guasti (2011))

b. Cromer wear glasses (2;0) (英語)
(Guasti (2011))
c. あいた，あいた (意図：あけてほしい) (ゆうた 1;07)
(日本語) (Murasugi, Nakatani and Fuji (2010))
d. ババ パイた (意図：泥を払ってほしい)
(Sumihare:1;08) (日本語)
e. ビュウ ビュウ (絵をかいてほしい) (ゆうた 1;08)
(日本語) (Murasugi, Nakatani and Fuji (2010))

(12a) では不定詞 *dormir* が，(12b) では三人称の一致のない動詞形 *wear* が表れている．(12c) の場合は，代用形「た」形が「あけて」という要求の意味で用いられている．(12d) は Noji Corpus (CHILDES) に含まれる Sumihare の発話例であるが，mimetics「パイ」が「た」を伴って「手に付着した泥を取り除いてほしい」という要求の意味を含んでいる．日本語では，mimetics が裸で (疑似) 不定詞としてあらわれることもある．(12e) は中谷友美氏が観察した発話であるが，「(お母さんに) 絵をかいてほしい」という要求の意味で用いられており，末尾のピッチが上がる特徴がある．これらは言語獲得史の中で (疑似) 主節不定詞として示された例である．[5]

(疑似) 主節不定詞が発話される時期の幼児言語には，格に関しても，一定の特徴がある．例えば，主語の名詞句に，主格以外の大人の格とは異なった格が表れる場合がある．

(13) a. Her haven't got her glasses (2;09) (Huxley (1970))
b. Him fall down (2;03) (Schütze and Wexler (1996))

Schütze and Wexler (1996) の提案した Agreement/Tense Omission Model (ATOM) 仮説によると，主節不定詞が表れる時期とは，時制などの素性が未指定である段階であり，したがって，英語を母語とする幼児の発話において，主節の動詞が不定詞で表れるときには，(13) に示すように，主語の名詞句には主格以外の格が標示される特徴が観察される．この仮説は，(疑似) 主節不定詞の段階では，一致や格の与値に関する時制のメカニズムについて母語のそれとは異なる段階があることを示唆している．ATOM 仮説を，ミニマリスト

[5] 日本語の主節不定詞現象については Murasugi and Fuji (2009)，Murasugi (2015) などを参照されたい．なお，安宅・伊藤 (2013) は，1 歳 9 カ月から 2 歳 11 カ月の幼児 95 名を調査し，Murasugi and Fuji (2009) の提案した動詞の獲得の最初の段階 ((疑似) 主節不定詞の段階) の存在が支持されるとする結果を発表している．

プログラムにおいてとらえなおすとすれば，この時期の幼児言語は，ϕ素性一致のメカニズムが少なくとも不完全であることになると考えられる．

日本語を母語としようとする幼児発話にも，英語と相似する発達段階の特徴がみられる．ここでは，CHILDES データベース（MacWhinney（2000））に含まれる日本語を母語とする幼児の自然発話コーパスの中から，先に挙げた Ayumi の例をとってみよう．他の日本語話者と同様に，Ayumi は生後 1 年の頃に一語文，2 歳頃に二語文を，（14）および（15）にそれぞれ示すように，産出を始める．（14b）に示すように，一語文の段階ですら，オノマトペは Ayumi においても，名詞的に創造的生産的に使われる．

（14）a. ぱっぱ（葉っぱ）（1;05）
　　b. じゃあじゃあ（水）（1;06）
（15）a. ぱぱ，ねんね（1;10）
　　b. きゅっきゅっ ねんね（1;11）
　　（祖母が救急車で運ばれた時の様子を示唆して）

また，二語文の頃に，動詞や後置詞とその補部に関する語順において，母語の大人の語順と齟齬の認められる発話は記録されていない．

（16）a. あわあわ，ないない（2;01）
　　b. あーちゃん，しーしー，た（2;02）
　　c. お父さんに（2;06）（お父さんにもらった，の意味）
　　d. いっしょに（2;06）（一緒に行く，の意味）

一方，二語文の頃の Ayumi の産出には大人と異なる点もみとめられる．（17）に示すように格助詞「は」が表れる同時期，主格「が」は（18）に示すようにあらわれない．

（17）a. お母さんは？（2;03）
　　b. こっちは？（2;03）
（18）a. はな，きれい（2;02）
　　b. めーかいかい（目がかゆい）（2;04）
　　c. パパきた！（2;04）
　　d. ぴっぴなんないね（2;04）

話題を標示する「は」格は，比較的早期の発話において観察されるのに比して，時制と関連する主格は，一貫して脱落した形式で発話される．

興味深いことに，（18）のように「が」が落ちている 2 歳 3 カ月頃の Ayumi の発話には，（19）に示すような形容詞が含まれている．

（19）かたい，冷たい，熱い，かわいい，すごい，めーかいかい，重たい，くわい（暗い），甘い，新しい，まぶしい

このとき発話された形容詞について，それぞれの過去形は記録されていない．

格の獲得についての段階に変化がみられるのは，Ayumi が 2 歳 8 カ月の頃と考えられる．記録された自然発話には与格や属格の付与された「誤った」主語とも解釈されうる例も皆無とはいえないが，大人と同様の主格「が」が発話に表れるようになる．

（20）a. ぺんぎんちゃんがくしゃみした（2;07）
　　b. お母さんがヒヒ人形つくろうって言ったよ（2;07）
　　c. お母さんがくしゃみしたの（2;08）
　　d. あゆみちゃんがぎゅうにゅうこぼした（2;08）
　　e. おとうさんのお風呂入ったの（2;08）
　　f. おとうさんにつぶつぶ集めて（2;08）

「が」格が表れる時期の Ayumi の発話には，時制を伴う形容詞節も少なからず記録されるようになる．

（21）a. すっぱかったの？（2;08）
　　b. おいしかった（2;07）
　　c. お風呂しょっぱかった（2;08）

産出しないからといって理解していないとは限らないが，自然発話から判断する限り，Ayumi は，格と時制に関する日本語の大人の仕組みを 2 歳 8 カ月頃にはおおむね獲得したとみなすことができるだろう．

ここで重要なのは，格や時制に関する幼児の発話の特徴が，大人のそれとは異なるという点である．幼児特有の言語獲得の中間段階が，言語にかかわらず，人の心に実在する．ミニマリストプログラムの枠組みでとらえなおせば，言語獲得の過程には，時制や一致に関するメカニズムが，母語の大人の仕組みとは異なる段階がある．このことも，幼児は，言語環境にある文を模倣するだけではなく，自らに内在する文法知識の仕組みによって，大人とは異なる文法に基づいて文を作り出していることを示唆する．

では，幼児に内在する文法知識の仕組みとはどのようなものなのだろう．次節では，上記の幼児の文法獲得の「中間段階」がミニマリストプログラムの理論構築にどのような意義をもちうるのかについて考察した Murasugi（2020）

を概説する．

4. 言語獲得の中間段階からミニマリストプログラムへの示唆

前節に概観した言語獲得事実の具体的な記述から，中間段階の文法には大人の文法と矛盾している点が含まれることがわかる．本節では，大人の文法に至る試行錯誤の一段階として，幼児の言語獲得の中間段階があるとする仮説を紹介する．

まず大人の文法について考えてみよう．生成文法理論はまず，個別言語の文法を規則の体系として整備することに始まり，提示された規則群を説明すべき対象とした「原理とパラメターの理論」を経て，言語が言語として成立するために必要な最低限のメカニズムに基づいて原理群そのものに説明を与えようとする極小主義アプローチへと至った．Chomsky（2013）の提示するミニマリストプログラムは，以下の操作を中核に据えている．

(22) a. 併合：二つの要素 α と β から構成素 $\gamma=\{\alpha, \beta\}$ を形成する．
b. ラベル付け：併合によって形成された γ の性質を決定する．

(22a) に示した併合とはどのようなものか．例えば，他動詞 V と NP の例を考えてみよう．他動詞 V と NP から $\gamma=\{V, NP\}$ が形成される．γ が V と NP のどちらの性質を持つのかについては，主要部が中核的な役割を果たす．γ が主要部（語／形態素）と句を含む場合には，前者が γ の性質を決定する．したがって，$\gamma=\{V, NP\}$ は VP として解釈される．

一方，$\gamma=\{XP, YP\}$ のように二つの句を含む構成素は，一定の条件下でラベル付けがなされうる．文は，主語の NP と述部 TP＝{T（時制），VP} を併合することにより形成される．この場合には，「一致」により T が主語の人称，数などを表すことから，γ の中心となり，γ の性質を決定する．

では，一致が欠如している場合はどうなるのか．$\gamma=\{XP, YP\}$ のラベルを最小検索によって決定する際，X と Y は等しく γ 統語体のラベル候補となるため，γ 統語体のラベルは決定されず，解釈不可能となり，排除される．したがって文 TP 内の XP を移動して TP と併合した場合，新たに形成される $\gamma=\{XP, YP\}$ はラベルを持たないため，排除される．このように，英語のような言語においては，自由語順（かき混ぜ）が許されないことが説明される．

この理論は，性や数などの「一致」のある言語について説明力をもつ．しかし，性や数などの「一致」を欠く日本語などの言語においては，文はどのようにラベル付けがなされるのであろうか．日本語の類型的特徴は，どのようなラベル付けのメカニズムを仮定すれば，説明されうるのだろうか．日本語を特徴づける多重主語や自由語順（かき混ぜ文）などの日本語文は，いったいどのようにラベル付けがなされるのだろう．

この問いに答える仮説として，Saito（2016）は，格助詞や述語活用の接辞が句をラベル付けにおいて不可視化する（反ラベリング特性がある）と提案している．反ラベル付け特性とは，格助詞や述語活用が不随する句をラベル付けにとって見えなくする性質である．

(23) $\gamma=\{\alpha$P-Case, βP$\}$, where Case is suffixal.

例えば，日本語の文は，$\gamma=\{$NP が，TP$\}$ となるが，「が」が主語を反ラベリング特性により不可視化するため，γ は TP とラベル付けされる．さらに (24) に例示する多重主語文にも同様にラベル付けがなされる．

(24) 名古屋が一番道が広い．

Saito（2016）は，主語以外の要素を文頭に移動し，文と併合することで可能となる（11）に例示したような自由語順も，この反ラベリング特性の仕組みにより説明されうると提案している．目的語を文頭に移動すると $\gamma=\{$NP を，TP$\}$ が形成される，「を」が目的語を不可視的にするため，γ は TP とラベル付けされる．したがって日本語のような文法格の豊かな言語においては，多重主語やかき混ぜなどに伴う併合が可能になり，ここに言語間の相違が統一的に説明される．すなわち，Saito（2016）の提案した仮説は，二つの句が併合された場合のラベル付けメカニズムの相違が言語間変異を生むことを含意する．[6]

この仮説を幼児の言語獲得データから検証したのが，Murasugi（2020）である．前述した言語獲得の初期段階に見られる様々な「文法的な誤り」が，母語のラベル付けメカニズムを獲得するための試行錯誤のプロセスとして分析されている．

まず，(22a) に示した併合について，Murasugi（2020）は，$\gamma=\{V, NP\}$ というように主要部（語／形態素）と句を含む場合については，すでに二語文の段階で動詞や前置詞（後置詞）とその補部の語順が大人の語順と矛盾しないという広く知られた事実があることを根拠とし，主要部パラメターの早期獲得

[6] この仮説については，高野（2020）が二重焦点化，奥（2020）が計量詞作用域，斎藤（2020）が連体修飾節に関して，対照言語学的に日本語の特徴を分析している．また，Saito（2018）は，日本語の格や述語屈折が，英語の T と同様に，ラベル付けを行うことができない弱主要部であると仮定することにより，その反ラベル付け特性が導きだされるとする仮説を提案している．

は，「併合」の操作と，ラベリングアルゴリズムのうち，主要部とその補部を含む句のラベル付けが，観察されうる極めて早期の段階に獲得されていることを示すとする分析を提示する．

そのうえで，幼児の（疑似）主節不定詞現象と，その時期に格や時制に関する（12）や（13）のような「誤用」が広く幼児言語一般に存在する事実，さらに英語を母語とする幼児の「誤った」（10）のような「かき混ぜ文」に関する記述的研究に注目する．Murasugi（2020）は，（疑似）主節不定詞現象が日本語や韓国語などの一致のない言語においても観察されていることを確認した上で，2歳頃の幼児言語一般に広く観察される（疑似）主節不定詞現象，主格以外の格を付与された（誤った）主語，また英語を母語とする幼児の発話に観察される（誤った）「かき混ぜ」といった言語獲得における中間段階の「誤用」の特徴は，Saito（2016）によって提案された反ラベリング仮説を支持する証拠となる可能性を示唆している．

（疑似）不定詞現象が観察される時期について，Schütze and Wexler（1996）は，文構造 IP（Inflectional Phrase）の主要部の担う素性（Agreement（AGR）/ Tense（TNS））の指定が不十分な段階であり，AGR あるいは TNS を欠く（「Omit する」）可能性があるとする ATOM 仮説を提案している．この仮説によれば，格標示においても，IP の主要部が［－agreement，－tense］の素性を持つ場合には属格主語（例：**My do it*）が，IP の主要部が［－agreement，＋tense］の素性を持つ場合には与格主語（例：**Me want it*）が表れる．ATOM 仮説は，幼児言語に主節不定詞が観察される時期と格の「誤用」が発話される時期が偶発的に同時期なのではないことを説明する．

さて，ATOM 仮説をミニマリスト理論のもとでとらえなおせば，それは，2歳頃の幼児には ϕ 素性一致（ϕ-feature agreement）のメカニズムを随意的に機能させている段階があると言い換えることができる．大人の文法において，ラベル付けは，ϕ 素性の一致によって可能となることから，ϕ 素性の一致はラベル付けをするために不可欠なものである．では，言語獲得の中間段階において，ϕ 素性一致（ϕ-feature agreement）のメカニズムが随意的に機能するということはどういうことか．そのときの幼児言語の「文のようなもの」はどのようにラベル付けをされるのか．あるいはラベル付けされていないとすれば，「文のようなもの」はどのように認可されているのだろう．

Saito（2016）は，日本語のような ϕ 素性の一致を欠く言語においては，文法格がラベル付けのアルゴリズムに重要な役割を果たしているとする提案をしている．その提案の心には，併合操作は本来自由であるはずなのに，なぜ，限られた言語でしか，かき混ぜや多重主語のような併合が許されないのかという問いがある．その問いに対して，Saito（2016）は，前述したように，日本語のような多重主語やかき混ぜを許し，接辞文法格や空項，複合動詞などを豊かに持つ ϕ 素性の一致を欠く言語においては，（弱主要部（Weak Head）としての）接辞文法格がラベル付けをするために構成素を不可視化すると提案する．

では，主節不定詞現象や格の「誤用」を示す英語を母語とする幼児は，いわゆる ϕ 素性一致を欠く言語，すなわち，日本語のような言語の文法をもつことを示唆するのであろうか．それがゆえに，英語を母語とする幼児は（10）のような「かき混ぜ」を発話するのだろうか．Murasugi（2020）は，この，一見したところ興味深い可能性を否定する．いったん反ラベル付けの機能をもつ文法格を格システムとして仮定した幼児が，抽象格に移行すると考えるには，習得可能性の観点から重要な問題があると議論した上で，（疑似）主節不定詞現象の観察される時期とは，母語のラベル付けの仕組みを模索する試行錯誤の時期であると考察する．幼児は，意味的には名詞句と述部から成る「文のようなもの」を生成するが，その文の内部において，どのようなラベル付けができるかは未獲得の段階にあるという可能性を指摘する．ϕ 素性一致が大人のそれとは異なる段階では，具体的なラベル付けのシステムが未獲得であるがゆえに，英語を母語とする幼児も，かき混ぜをしてはいけない理由を認めることができずに，（10）のような「かき混ぜ」を生成する可能性があると提案している．

では，ラベリングの仕組みが未獲得の時期，幼児は，いったいどのように「文のようなもの」を認可しているのだろうか．Murasugi（2020）は，ϕ 素性一致が大人のそれとは異なり，ラベル付けのシステムが完全には獲得されていない（疑似）主節不定詞の段階では，幼児は，二つの要素を Topic と Comment の関係で結び付けているという古くから言語獲得研究で指摘されてきた提案を想起する．紙面の関係で，詳細は Murasugi（2020）に譲るが，この議論は，実際，（17）と（18）の対比に見た Ayumi の観察と矛盾しない．Ayumi は，「が」格を落としている時期においても「は」格は表している．

以上のような議論に基づき，Murasugi（2020）は，これらの一見，偶発的にもみえる幼児言語の「誤用」は，Saito（2016）の提案した反ラベリング仮説を裏付ける証拠を提示すると論じている．併合および主要部とその補部を含む句のラベル付けが早期に獲得されるのに比して，$\gamma = \{XP, YP\}$ のように二つの句を含む構成素の「ラベル付け」は，言語により異なる形でなされるがゆえに，その獲得に時間がかかる．

ϕ 素性一致のある言語では，一致によってラベル付けがなされる．一方，一致のない格助詞を持つ言語では，弱主要部である格助詞や述語活用の接辞が句をラベル付けにおいて不可視化し，格助詞を伴わない側がラベルを決定する．

ラベル付けの仕組みそのものは普遍文法によって決定されているとしても，言語獲得において，ϕ素性一致の有無や格助詞に関する特性の獲得には時間がかかるがゆえに，γ={XP, YP} のように二つの句を含む構成素の「ラベル付け」はその獲得に時間がかかると考えられる．この言語獲得の特徴こそが言語間変異の根拠でもあり，これが幼児言語の（疑似）不定詞現象ならびに格や語順に関する「誤用」の理由でもあると分析される．

5. 結論

第一言語獲得の分野は，幼児の言語について，いつ（When），どのように（How），そしてなぜ（Why）諸々の特徴が存在するのかを問い，記述的説明的に妥当な研究をめざすことによって自然科学分野の一部として位置づけられる．

幼児の文法獲得の中間過程とは，どのようなものか．それはミニマリストプロラムに対して何を示唆するのか．本稿では，言語獲得の論理的問題を概観した上で，幼児の言語獲得のプロセスについて整理し，過去の記述的研究と理論的研究をふまえ，ミニマリストプログラムのもとで提案された分析を紹介した．幼児が主要部を伴う併合やラベル付けが観察されうる早期の段階で獲得されているのに比して，二つの句が併合された場合のラベル付けメカニズムについては，（疑似）主節不定詞現象を経た段階で獲得されるとする分析（Murasugi（2020））を概観した．これは，Chomsky（2013）の併合とラベリングのメカニズムでは，一致のない言語を説明できないとする問題を提起し，言語間変異が {XP, YP} 構造のラベル付けに根ざすことを提案する Saito（2016）を，言語獲得の側面から支持するものである．

幼児言語に広く観察される（疑似）主節不定詞現象や格の誤用，（大人の語順とは異なる）いわゆる自由な語順といった「誤用」が，ほぼ同時期に観察されるのは，偶然がなせる仕業ではない．またミニマリストプログラムで普遍文法の一部とされるラベル付けにおいて，当該言語のϕ素性一致の有無と格の特性が言語間変異の源でもあり，幼児が「誤る」原因でもある．ミニマリストプログラムにおいて，文法獲得に時間を要する本質的な部分とは，母語のラベル付けの仕組みを獲得することにある．この結論は，幼児言語の形式と意図される意味を正確に記述し，それを言語理論のもとで分析した，多くの対照言語学的獲得研究の積み重ねの上に得られたものである．

参考文献

安宅涼香・伊藤友彦（2013）「言語獲得初期の典型発達児における動詞の形態論的側面の獲得」『音声言語医学』54 巻 3 号，174–178.

Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33–49.

Guasti, Maria Teresa (2004) *Language Acquisition: Growth of Grammar*, MIT Press, Cambridge, MA.

Huxley, Renira (1970) “The Development of the Correct Use of Subject Pronouns in Two Children,” *Advances in Psycholinguistics*, ed. by G. B. Flores d’Arcais and W. J. Levelt, 141–165, North-Holland, Amsterdam.

MacWhinney, Brian (2000) *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk*, 3rd ed., Lawrence Erlbaum Associates, Mahwah, NJ.

村杉恵子（2019）「伊那方言『づら』 ── 時制句を補部にとる認識様態モダリティー」『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論 2』，小川芳樹（編），306–332，開拓社，東京.

村杉恵子（2020）「ラベル付けの相対的普遍性」『日本語研究から生成文法理論へ』，斎藤衛・高橋大厚・瀧田健介・髙橋雅彦・村杉恵子（編），66–88，開拓社，東京.

Murasugi, Keiko (2015) “Root Infinitive Analogues in Child Japanese,” *Handbook of Japanese Psycholinguistics*, 1170147, De Gruyter Mouton, Berlin.

Murasugi, Keiko (2020)”Parameterization in Labeling: Evidence from Child Language,” *The Linguistic Review* 37, 147–172.

Murasugi, Keiko and Chisato Fuji (2009)”Root Infinitives in Japanese and the Late Acquisition of Head Movement,” *BUCLD* 33 Proceedings supplement, 1–12, Cascadilla Press, MA.

Murasugi, Keiko and Tomoko Hashimoto (2004) “Three Pieces of Acquisition Evidence for the v-VP Frame,” *Nanzan Linguistics* 1, 1–19.

Murasugi, Keiko, Tomoko Hashimoto and Chisato Fuji (2007) “VP-shell Analysis for the Acquisition of Japanese Intransitive Verbs, Transitive Verbs, and Causatives,” *Linguistics* 45, 615–651.

Murasugi, Keiko, Tomomi Nakatani and Chisato Fuji (2010) The Roots of Root Infinitive Analogues: The Surrogate Verb Forms Common in Adult and Child Grammars,” *BUCLD* 34 Proceedings supplement, 1–12, Cascadilla Press, MA.

奥聡（2020）「スクランブリングか？ QR か？ ラベル付けに基づくアプローチ」『日本語研究から生成文法理論へ』，斎藤衛・高橋大厚・瀧田健介・髙橋雅彦・村杉恵子（編），48–63，開拓社，東京.

Radford, Andrew (1990) *Syntactic Theory and the Acquisition of English Syntax*, Basil Blackwell, Oxford.

Saito, Mamoru (2016) “(A) Case for Labeling: Labeling in Languages without ϕ-

feature Agreement," *The Linguistic Review* 33, 129–175.
Saito, Mamoru (2018) "Kase as a Weak Head," *McGill Working Papers in Linguistics* 25(1) (Special Issue in Honour of Lisa Travis), 382–391.
斎藤衛 (2020)「弱主要部と言語類型論」『日本語研究から生成文法理論へ』，斎藤衛・高橋大厚・瀧田健介・髙橋雅彦・村杉恵子 (編)，2–18，開拓社，東京.
Schütze, Carson and Kenneth Wexler (1996) "Subject Case Licensing and English Root Infinitives," *BUCLD* 20, 670–681, Cascadilla Press, MA.
鈴木情一 (1987)「幼児の文法能力」『子供の言語心理 (2)』，福沢周亮 (編)，141–179，大日本図書，東京.
高野祐二 (2020)「二重側方移動とラベル付け」『日本語研究から生成文法理論へ』，斎藤衛・高橋大厚・瀧田健介・髙橋雅彦・村杉恵子 (編)，19–33，開拓社，東京.
Wexler, Kenneth (1998) "Very Early Parameter Setting and the Unique Checking Constraint: A New Explanation of the Optional Infinitive Stage," *Lingua* 106, 23–79.
湯澤敏 (2003)『おらが知ってる伊那の方言』しんこう社，伊那市.

英語の否定呼応文における否定主語の分布について*

柳　朋宏
中部大学

1. はじめに

現代英語では，否定辞 not と nobody，nothing などの否定的不定辞 (negative indefinite) を含むが，否定の解釈が相殺されず否定の解釈となる否定呼応 (negative concord) は容認されない．しかしながら，宇賀治 (2000: 317) によれば，17 世紀初頭までは稀な表現形式ではなかった．本論文では，英語否定呼応文における否定主語の分布を通時的に調査し，否定辞が生起する統語位置の変化と否定主語の認可方法の推移から，英語の歴史的「本流」における否定呼応の衰退と，「支流」である地域変種における否定呼応の保持について考察する．英語の本流による変化では，否定呼応文における否定主語は，否定辞の c 統御領域内もしくは否定辞との指定部・主要部関係で認可されていたが，否定辞 ne から not への推移に伴い，否定辞の c 統御領域内でのみ認可されるようになったと論じる．

現代英語には否定呼応を容認する地域変種が存在する (Ladusaw (1992), King (2006), Hughes et al. (2012), Blanchette (2016) など参照)．イングランド南東部の地域変種の例を (1), (2) に示す.[1] (2) が示すように，一部の地域変種では「否定主語–否定辞」語順が可能である．

* 本論文は，東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」主催第 7 回ワークショップと東京外国語大学 AA 研共同利用・共同研究課題「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」第 3 回研究会 (2021 年 9 月 5 日・6 日オンライン開催) における口頭発表の一部に加筆修正したものである．貴重な助言をくださった小川芳樹氏と前田満氏，匿名の査読者 2 名に感謝の意を表したい．なお，本研究は JSPS 科研費基盤研究 B (20H01269) と基盤研究 C (21K00592) の助成を受けたものである．

[1] FRED = Freiburg Corpus of English Dialect; KEN = Kent; LND = London; MDX = Middlesex. (Hernández (2006: 4))

コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論 3

編　者　小川芳樹・中山俊秀
発行者　武村哲司
印刷所　日之出印刷株式会社

2022 年 12 月 12 日　第 1 版第 1 刷発行©

発行所　株式会社　開 拓 社
〒112-0013 東京都文京区音羽 1-22-16
電話　(03) 5395-7101（代表）
振替　00160-8-39587
http://www.kaitakusha.co.jp

ISBN978-4-7589-2377-4　C3080

JCOPY ＜出版者著作権管理機構 委託出版物＞
本書の無断複製は，著作権法上での例外を除き禁じられています．複製される場合は，そのつど事前に，出版者著作権管理機構（電話 03-5244-5088，FAX 03-5244-5089，e-mail: info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください．